

小學修身課書

南摩綱紀編

一

241  
109

K110.1

188c

南摩綱紀編

小學脩身課書

明治十五年四月  
廿五日版權免許

中外堂藏版



云莢

行篤教  
忠信

小學脩身課書

文部大書記官辻新次公題辭

中外堂藏版

文部大書記官西村茂樹公序  
序

# 任移過新次書



## 序

世有雖多不厭者。豐年之穀與  
教訓之書是也。穀多則價賤。得  
以養貧人。書多則教洽。得以喻愚  
人。困之所最病者。在民之貧。與一而

療之之良劑。莫若穀。其書為。然  
 穀也。天造。非人之所能為。其可。既為  
 者。獨以書耳。友人南摩君。舟余  
 講究。備身之學。其數年。其除力  
 溢。為此書。余知其必有。益於世。故也。

或人疑。伯百。著書之。言。他。乃。者  
 甚多。以。之。其。得。無。北。屋。額。加。第。屋。之  
 類乎。余曰。世。之。著。修。身。之。書。其。類  
 言之矣。行。於。躬。則。未。也。若。君。躬  
 能。之。者。其。感。人。之。原。蓋。以。其。書。

言語之外者焉。以老訓之書不厭  
 之多乎。或人唯其退。偶書肆中外  
 重為此書。常存。因錄其言。以附之。  
 明治壬午四月泊翁道人西村茂

樹識



小學修身課書

緒言

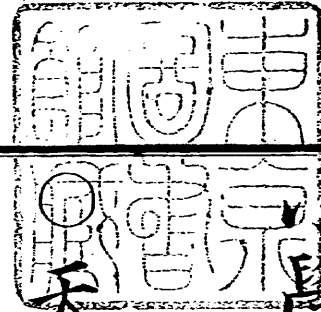
一此書ハ和漢ノ經史及ビ雜書中ニ就  
 テ。修身ニ關スル嘉言善行ヲ摘採ス。  
 一或ハ原文ヲ隱括シ。或ハ意ヲ取テ辭  
 ヲ略シ。或ハ長ヲ縮メテ短クシ。或ハ  
 一章ヲ分チテ數章ト爲スモノアリ。  
 其漢文ノ如キハ。皆假字ヲ雜ヘテ。コ

レヲ譯記ス。

一 每章摘採スル所ノ書名ヲ掲ゲテ。其  
出處ヲ示ス。中ニ就テ。書名ヲ掲ゲザ  
ルモノハ。諸書ヨリ混採シテ。唯其意  
ヲ記スルモノニ係ル之ヲ要スルニ。  
皆余ガ私言ニ非ザルナリ。

明治十五年四月

編者識



小學修身課書卷一

初等二年後期

南摩綱紀編

天子より庶人に至るまで。

みな身を修るを以て本と爲

す。大學

○身を修るは。五倫五常の道

を身に行ふにあり。

○父子親あり。

君臣義あり。

夫婦別あり。

長幼序あり。

朋友信あり。孟子

これを五倫といふ。

親とい親み愛するなり。

義とい宜しき筋に従ひて

行ふなり。

別とい夫と婦との行ひ自

ら差別あり。愛に押れて踰

えざるをいふ。

序とい先後の順序あるを

いふ。

信とい誠實にして偽りな

きをいふ。

○仁義禮智信。

これを五常といふ。

人の性にして。萬善の根源を

り。五常訓

仁い人を愛し。物を憐むな

り。

義い宜しきに從ひて。事を



處するなり。

禮ハ次序品節あるなり。

智ハ善惡を知り分くるな

り。

右を四徳といふ。

信ハ右の四徳の實にある

をいふ。

○五常の外に心なく。五倫の

外に道なき。五常訓

○子弟たる者ハ能く孝弟を

盡すべし。

孝とい善く父母に事ふる

なり。

弟とい善く兄長に事ふる  
をいふ。

○孝い徳の本なり。

教の由りて生ずる所なり。孝經

○愛と敬とい。孝弟を行ふの

主なり。

○愛い親より始む。

敬い長より始む。禮記

○父母を愛敬するを第一と  
す。

次に兄弟一族を愛敬すべし。

孝經 卷一 第一 孝經 論語 五帝訓

其次に他人を愛敬すべし。

りれより推して禽獸草木を

愛すべし。五帝訓

○父母に事ふるに温和を主

とす。家道訓

○父母の命に違ふべから

ず。禮記

○父母の教誡に従ひて怒り

恨むべからず。同

○君子の本を務む。孝弟の仁

を爲すの本なり。論語

○出入する時に必ず父母に

告ぐべし。禮記

○父母在せば遠く遊ばず。

遊ぶこと必ず方あり。論語

○朝と夜とい。必ず安否を伺

ふべし。禮記

○父母に事ふるに。冬は温か

に。夏は涼しくす。同

○父母愛すれば。喜びて忘る

べからず。同

○父母惡むとも。懼れて怨む

べからず。同

○身體を傷つけざる。孝の

孝經 卷一 第八

始なり。孝經

○名を揚げて父母を顯すは。

孝の終なり。同

○君子は親に孝なり。故に移

して君に忠すべし。孝經

○兄に順なり。故に移して長

に弟すべし。同

○孝は親を寧んずるより大

なるはなし。揚子

○高き處に登るべからず。小學

○深き淵に臨むべからず。同

○父に非れば生れず。

小學各身課書 卷一 八 中外堂藏版

師に非れば知らず。

故に父師に事ふること。一の

如くすべし。國語

○君にハ忠を盡して。我身を

忘るべし。初學訓

○徐に行きて長者に後る。こ

れを弟といふ。孟子

○疾く行きて長者に先たつ。

これを不弟といふ。同

○已より年の倍長むる人に

は。父として事ふべし。

十年長ずる人には。兄として

小傳 仙舟 詩經 卷一 中外 堂 雜 冊

事ふべし。

五年長ずる人には、並び行きて

て、稍々後るべし。禮記

○長者の賜ふ物の辭退すべ

からず。同

○己に如かざる者を友とす

ること勿れ。論語

○文を以て友を會し。友を以

て仁を輔く。同上

○善を責るの朋友の道なり。

孟子

○居處の必む恭しくむ。

中外 堂 雜 冊 十 中外 堂 雜 冊

歩立の必を正しくむ。

視聽の必を端しくむ。

言語の必を謹しむ。

容貌の必を莊よむ。程董學則

○途に長者に遇はば必ず敬

禮すべし。禮記

○玉琢かさされの器を成さず。

人學ばざれば道の知らず。同

○時過ぎて後に學べば苦み

て成り難し。同

○獨り學びて友なければ孤

陋にして見聞寡し。同



○人の徳義と才智を益すの學問にあり。

○學問の山に登るが如し。怠

れれば日日に下る。静寄語録

○大人の學の道の爲にす。

小人の學の利の爲にす。楊子

○千里の行は足下に始む。老子

○書は熟讀せざれば用に立

ち難し。省儉錄

○書を讀むの精熟を貴びて。

多を貪るを貴はず。初學知要

○光陰は惜むべし。逝水の如

顏之推

○日晷一たび移れい。千年再  
び來らず。省儉錄

○人生一たび死すれい。萬古  
再び生ぜず。同

○善に習ひば日々に樂む。

君子訓

○惡に倣ひば日々に苦む。

同

○惡にい趣き易い。慎むべし。

同

○善にい進み難い。勉むべし。

同

○善を積む家には餘慶あり。

易經

○不善を積む家には餘殃あり。  
り。同

○身を立るは。學を勉むるを

以て先とす。五種遺記

○學を勉むるは。書を讀むを

以て本とす。同

○書を讀むこと百遍なれば。

其義自ら通ず。童蒙須知

○自ら敬すれば。人も亦已を

敬す。讀書録

○自ら慢すれば人も亦已を

慢す。同

○吾が能に矜るハ恥あり。畜徳録

○吾が不能を飾るも亦恥を

り。同

○明鑑は形を照す往古は今を知る。孔子家語

○前車の覆るは後車の戒なり。

賈誼新書

○大なる過ちは少一の忍びざるより起る。畜徳録

○己が欲せざる所は人に施すこと勿れ。論語

○君子は己に求め小人は人に求む。同

○己を責むれば身修まる。大和俗訓

○人を責めざれば恨まるる

ことなり。同

○惡は小なりとも爲すこと勿れ。昭烈

○善は小なりとも爲さざること勿れ。同

○過ぎたるい及ばざるが如

小學校修身課書 第一卷 終

論語

○進むことと銳ま者は退くこと速なり。孟子

菱潭書

小學修身課書卷一終

明治十五年四月廿五日版権免許  
明治十八年四月廿日五刻御届  
明治十八年五月 出版發賣

七

青森縣士族

編輯人 南 摩 綱 紀

東京府平民

出版人 柳河梅次郎

日本橋區本町三丁目十番地



製本發賣所  
慶島縣下薩摩國慶島六日町通仲町

書肆 吉田幸兵衛

小學脩身課書

南摩綱紀編

二

K1101  
113  
2